大野昭和斎略年譜

西暦（年号）	年齢	事　　暦
1912（明治45年）	0	指物師・片岡斎三郎の長男として総社市に生まれる。本名は片岡誠喜男。
1921（大正10年）	9	倉敷市西阿知に転居する。
1926（大正15年）	14	河内尋常高等小学校（現在の西阿知小学校）を卒業と同時に、父について木工芸の道に入る。
1935（昭和10年）	23	玉島在住の文人画家・柚木玉邨から「昭和斎」の号を授かる。
1965（昭和40年）	53	第12回日本伝統工芸展に「桑造木象嵌盛器」が初入選。以後、入賞を重ねる。
1968（昭和43年）	56	日本工芸会会員となる。
1972（昭和47年）	60	第19回日本伝統工芸展に出品した「桐造銀線象嵌硯筥鷹嶺」が特待となる。
1974（昭和49年）	62	岡山・香川の作家を集めて木創会を結成する。
1977（昭和52年）	65	岡山県重要無形文化財の指定を受ける。
1980（昭和55年）	68	倉敷市文化賞受賞。
1984（昭和59年）	72	独自の杢目沈金技法を完成させ、国の重要無形文化財（人間国宝）の認定を受ける。
1987（昭和62年）	75	岡山県三木記念賞受賞。
1992（平成４年）	80	倉敷市名誉市民となる。
1994（平成６年）	82	総社市名誉市民となる。
1996（平成８年）	84	逝去。

記念館利用案内

- ●開館時間　午前9:00～午後4:30
- ●休　館　日　月～金曜日，年末年始（12月29日～1月3日）
  国民の祝日に関する法律に規定する休日
- ●入　館　料　無料
- ●交通アクセス

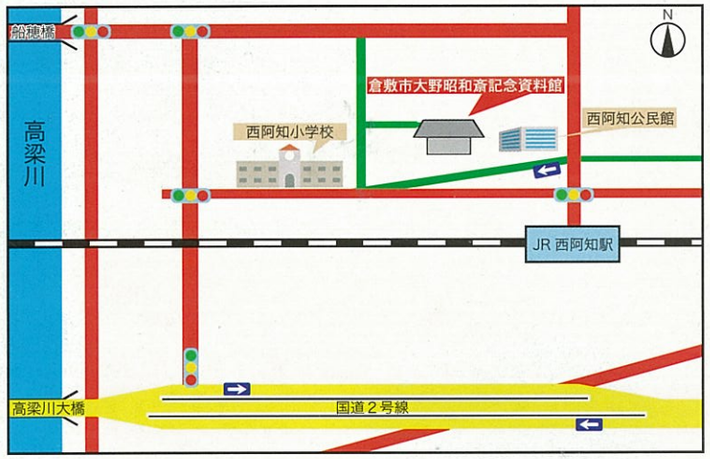
公共交通機関

○JR西阿知駅下車（北口）→ 徒歩5分（約400m）

自家用車

○高梁川大橋東詰→3分

○船穂橋東詰→3分

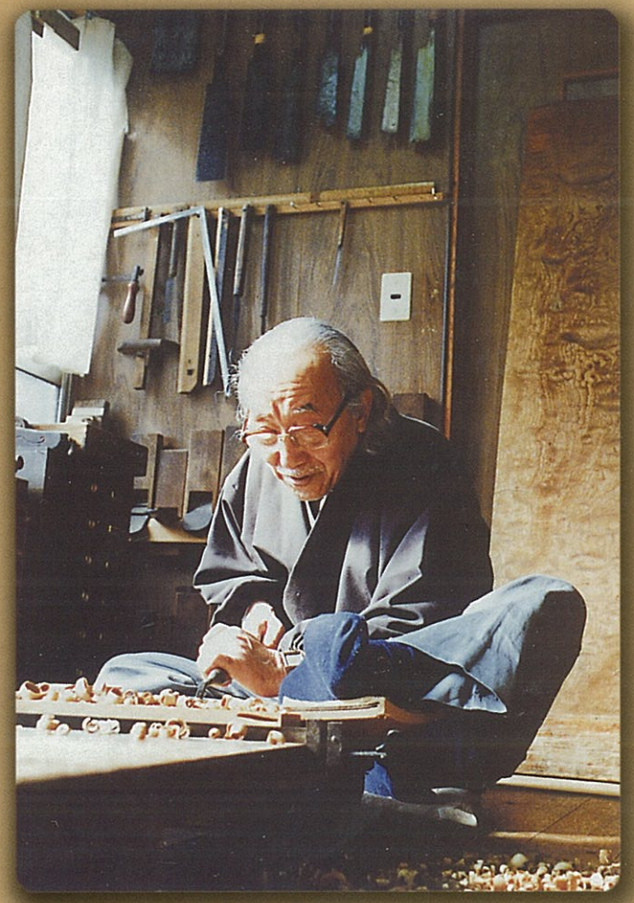


- ●駐　車　場　普通車2台
- ●所　在　地　〒710−0807 倉敷市西阿知町1144番地12
  TEL086−466−2533（記念資料館）
- ●お問い合せ先　倉敷市文化産業局文化観光部文化振興課
  〒710−8565 倉敷市西中新田640番地
  TEL086−426−3075

人間国宝

大野昭和斎

木工芸の道一筋



倉敷市大野昭和斎記念資料館

大野昭和斎

（本名　片岡誠喜男）

大野昭和斎は、明治４５年、指物師斎三郎の長男として出生した。

職人気質に徹した父は、年少のわが子にも厳しい態度で接し、自分の持つ木竹工芸の技術のすべてを仕込んだ。天性の素質を持つ昭和斎は、生涯父の他に一人の師匠も求めず、すべて独創で至高の芸術に到達したのである。

彼の青春時代、その才能のただならぬことを見抜いたのは、当時第一級の絵師であり、文人であった柚木玉邨であった。玉邨は模索する青年指物師に向かって、芸術とは何かを語り続けた。またこのとき、玉邨は『昭和の名人たれ』の期待をこめて、昭和斎の号を贈った。新時代を示唆した明るい雅号は、青年の意向にぴったりと適っていた。

昭和斎の努力は実を結んだ。指物、象嵌、漆などあらゆる面に優れた技術を身につけ、それが造形のなかに見事に調和していた。しかし、戦後、彼の理解者の斜陽化と、納得ゆくまで制作せぬ寡作とが重なって、大野家の生活は貧窮した。しかし、彼の意欲はますます壮んであった。

やがて、真価が認められる日が来た。昭和４０年日本伝統工芸展に初入選、４３年同展会長賞の最高賞を獲得、４６年同展の鑑査委員となり特待出品を続け、木工芸部門の第一人者の地位を揺るぎないものとした。昭和４９年『木創会』を設立、後進の指導に当たってきた。昭和５２年岡山県重要無形文化財に指定された。木の心を知った名匠・大野昭和斎の技術が、公に保存され、後進に伝えられる基礎が確立したのである。

それから７年後の昭和５９年には、独自の杢目沈金技法を完成させ、国の重要無形文化財（人間国宝）の認定を受けた。数々の展覧会を催し、そのすべてが好評であり、平成４年には倉敷市名誉市民となった。

その後も精力的に創作活動を続けていたが、平成８年肺炎のため惜しまれつつ亡くなった。享年８４。

昭和最後の名工・大野昭和斎とその作品は、今も多くの人々に愛されている。

代表作品

桑造木象嵌盛器

桑材、刳抜きによる菓子器。

方形平皿形の角丸の四隅より中央にかけて、各二条の波状文様を象嵌する。象嵌には朴・柊・漆木を用いる。

はなはだ流動的で立体感のある表現になり、斬新な感覚がうかがえる。

昭和三十八年日本工芸会東中国支部展支部長賞受賞　方三五・五cm　高五・九cm

桐造銀線象嵌硯箱

桐材、方形に近い撫角の合わせ印籠蓋造、刳物による硯箱。

蓋に大きく中盛りを施し、右上端および左下端部にわずかに浮雲を浮彫して、境辺に銀線を象嵌し、蓋・身の表面を拭漆仕上げとしている。

蓋の表面には地の砂磨きによる荒い杢目を効果的に用いてその曲率も好ましく、力強い表現は刳物ならではの作品といえよう。内部は黒漆艶減し仕上げとする。

昭和四十七年第十九回日本伝統工芸展特待出品

蓋縦　二五・八cm　横　二六cm　高八・〇cm　身縦　二四・三cm　横一九・九cm　高四・五cm　全高九・八cm

桑小櫃

桑材、長方形印籠蓋造、指物による床脚付き小櫃。

組手は留形隠蟻組、蓋は面取り切面部分長手に各十三個、側に各二個、妻手に各十個、側に各一個の星型鋲、身には長手に各三個、妻手に各四個の同じく飾鋲を打っている。正面中央に六花形銀座に鎖子金具、背面に二双の蝶番金具を着装し、金具はすべて金銅としている。刳形のある床脚にも、上下に隅金具および中散し金具を飾っている。渋出し蠟磨きとする。

昭和五十八年第三十回日本伝統工芸展出品　縦三二・五cm　横二六・〇cm　全高一七・五cm

玉椿杢目沈金折紙香盆

玉椿材、刳物による変形香盆。

長方形材の両端を、折紙のごとく折返した形態に象った折紙盆、その意匠は作者の独創によるものである。

玉椿の杢に金箔を摺り込み、拭漆仕上げとしている。

平成二年作　縦三三・〇cm　横四八・五cm　最大高四・八cm

※代表作品の文章、写真は㈱至文堂発行の書籍「人間国宝　大野昭和斎の木工芸」（図版解説は木内武男氏）から転載

当時の制作風景

欅玉杢の盤木を適当に挽く

製図作成中

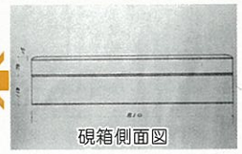
長さを所定の寸法に揃える

墨付け

硯箱側面図

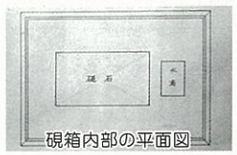
長さを所定の寸法に揃える

鋸引き



硯箱側面図

木取後の再乾燥



硯箱内部の平面図

蟻形隠留付け工作

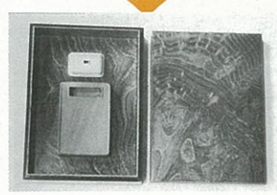
硯、水滴の嵌め込み

ペーパー仕上げ蓋の甲盛磨き

仮組

ペーパー仕上げ中板磨き

渋出し中板に石灰水を塗る



桑造線象嵌硯箱（完成）

蠟磨き、蠟を付ける

渋出し、蓋塗り

蠟磨き、柔らかい布でよく拭き上げる

石灰をすり落とす